

## 短大生のボランティア意識についての研究 (第1報)

A Study on Volunteer Consciousness of the College Students (Part 1)

海老名 和子

EBINA Kazuko

I はじめに

平成15年11月に第3回全国障害者スポーツ大会(以下わかふじ大会)が、静岡の地で行われる。この全国障害者スポーツ大会は、別々に行われていた「全国身体障害者スポーツ大会」と「全国知的障害者スポーツ大会」とを統合して行われた平成13年の宮城大会、高知大会に続くものである。そしてこの大会は、障害のある選手が参加し、競技を通じスポーツの楽しさを体験すると共に障害に対する理解を深め、障害者の社会参加の推進に寄与することを目的に開催している。そして静岡県で開催されるわかふじ大会は、「静岡で かなえよう夢 つたえよう感動」を大会スローガンとして、障害を持つ人々が全国から集い、幾つものスポーツで熱戦が繰り広げられ、また多くの交流をするのである。このような全国規模の競技大会では、一般の場合でも多くの人々が大会の舞台裏を支えている。しかし障害者スポーツ大会の場合には、障害者がスムーズに競技を遂行できるようにするためにより多くの人材が必要となってくるのである。今回のわかふじ大会に於いても数多くのボランティアが参加して大会運営を支えていくのである。具体的には、競技ボランティア、専門ボランティア(手話、要約筆記)、一般の県民ボランティア、学生ボランティア(わかふじアミー)などが関わっているのである。わかふじ大会で本校の学生が担当することとなった学生ボランティア(以下わかふじアミー)は、大会に参加する選手が、快適な環境の基で競技に臨むことができるよう案内・誘導・介助を行うと共に、選手との交流を深め大会運営の円滑化を図る事を役割としている。そしてわかふじアミーは、選手団と常に行動を共にして、参加する選手の案内・誘導・介助を行う選手団担当と、各競技会場で式典・競技の運営補助や競技場での案内・誘導・介助を行う競技担当とに分かれている。県立の医療福祉系短大である本校は、県下の医療福祉系の学校8校が、わかふじアミー養成協力校になっている中で最多の約440人が参加することになっている(競技担当240人、選手団担当200人)。わかふじ大会は、46年ぶりに静岡で開催したわかふじ国体に続いて行われることになっていて、このような大会にボランティアとして参加するということは、学生にとって生涯を通して貴重な経験といえるであろう。

今回このような機会を得て本校学生が、わかふじアミーとして活動することにより、学生の障害者に対する意識、障害者ボランティア意識がどの様に変化するのかを調査し、学生のボラ

ンティア活動について研究することとした。さらには医療従事者をを目指す者にとってのボランティア活動の意義についても検討していきたい。その第一段階として、わかふじ大会に参加する前の学生に対して障害者についての意識、わかふじアミーについての意識の現状を把握することを目的にアンケート調査を実施したので報告する。

## II 方法

時期：平成15年5月わかふじ大会リハーサル大会前にアンケート調査を実施した。

対象：対象は、本校歯科衛生学科1年生40人、2年生39人である。1年生は、9月までにわかふじアミー養成講座である手話講義を受講した。2年生は、1年時に手話講義を受講済みである。

また2年生のうち16人は、わかふじアミーのグループリーダーとしてリーダー研修会を1回受講している。

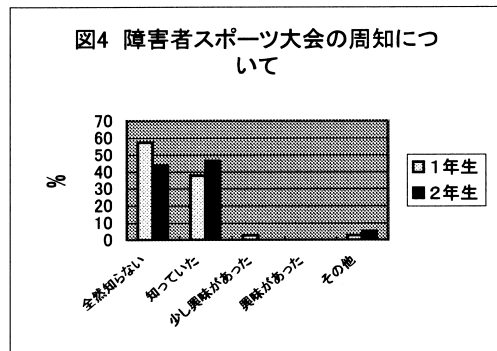
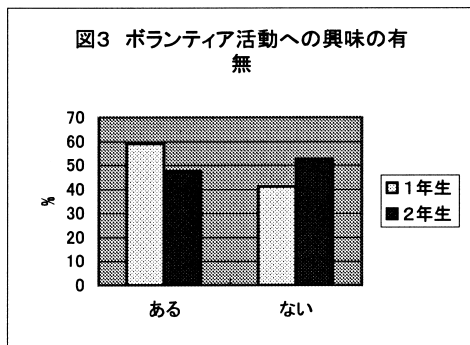
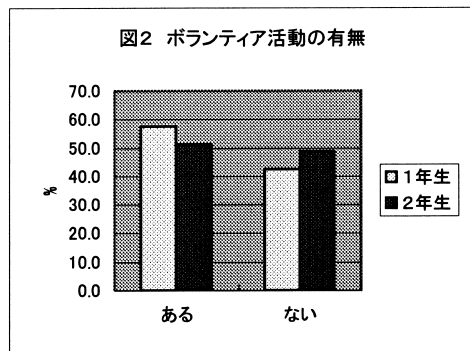
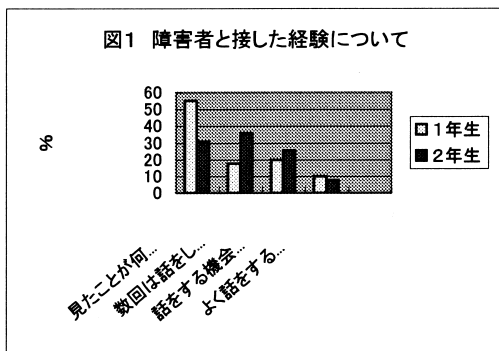
方法：無記名方式により障害者について、わかふじ大会についてのアンケート調査を実施した。

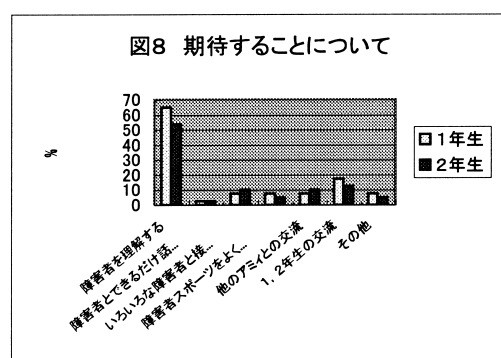
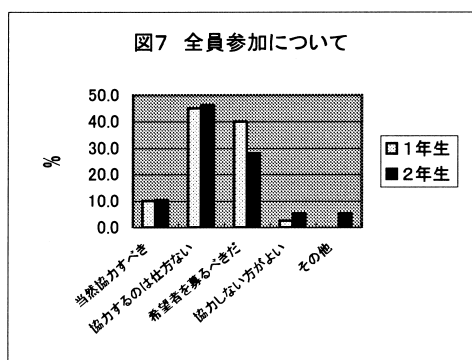
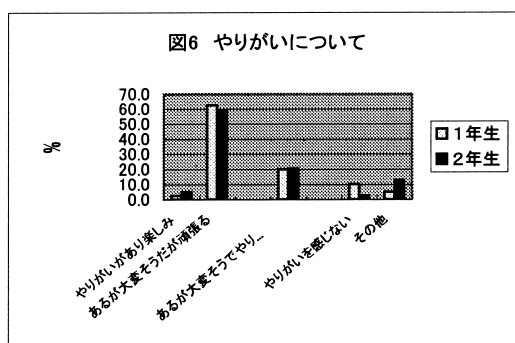
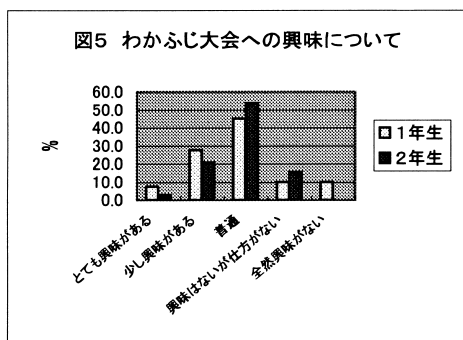
## III 結果

始めに学生の障害者に対する意識についての結果であるが、まず「障害者と接した経験について」の質問では、1年生は障害者を見たことが何回かある程度が最も多く55%で、2年生は数回は話をしたことがある程度の関わりが最も多く35.9%であり障害者と接した経験はそれほどない(図1参照)。学生が「障害者から連想するもの」として大別すると、1. 障害者の障害の状況、2. 障害者の関連施設、3. 障害の補助手段等、4. 障害者への接し方についてであった。また「障害者が日常生活で不自由を感じるのはどんな時か」との問いについては、バスや電車の乗降や道路の段差等の外出した時の状況を多くの学生があげている。その他には日常生活での身の回りの環境についての不自由さをあげている。なかには他者からの特別扱いや偏見に対して障害者は、不自由さを感じているのではないかと考えている学生もいた。また「ボランティア活動の経験について」の質問では、活動の経験があると回答した1年生が57.5%、2年生が51.3%と最も多く、半数以上が中、高校生の時期にボランティア活動を体験している(図2参照)。具体的には、障害者施設、養護学校、老人ホームの訪問であった。またボランティア活動経験のない学生への「ボランティア活動に興味があるか」との質問では、1年生58.9%、2年生47.4%とほぼ半数近くが、活動経験はないもののボランティア活動に興味を持っていた(図3参照)。希望するボランティア活動としては、障害者施設を訪問してみたいと思っている学生が多く、具体的活動としては一緒に遊んだり、話をしたりしたいと思っている。また現在学んでいることを生かし歯科保健活動を試してみたいと考えている学生もいた。

次に「わかふじアミーの活動」についてのアンケート結果であるが、まず自分達が学生ボランティアとして関わる「わかふじ大会の周知について」の回答で最も多かったのは、1年生では全然知らなかったという回答であり過半数強の57.5%であった。この回答は、2年生でも2番目に多く43.6%であった。この質問に対し2年生で最も多かったのは、わかふじ大会があることは知っていたで46.2%であった(図4参照)。また「障害者スポーツ大会について興味があるかどうか」の質問では、特に興味があるわけでも興味がないというわけでもない、普通であると回答したのが1年生45.0%、2年生53.8%であった(図5参照)。そしてわかふじアミーと

しての「ボランティアの活動がやりがいがあるかどうか」についての質問には、やりがいがあり楽しみであるという学生が1年生2.5%で2年生は5.1%とかなり少なく、やりがいはあるが大変そう、でも頑張りますという回答が1、2年とも最も多く1年生が62.5%、2年生が59.0%であった(図6参照)。今回のわかふじアミィのボランティア活動については、県国体局からの要請により学校行事と同様に扱い全員参加となっている(第一看護学科3年生、第二看護学科2年生は除く)。ほぼ強制的であり「全員参加について」という問いに対して学生の意見は、協力するのは仕方がないが1年生45.0%、2年生46.2%であった。次いで多かったのが、ボランティアの活動なのだから希望者を募るべきだったという意見で1年生40.0%、2年生が28.2%であった(図7参照)。またわかふじアミィとしてのボランティア活動について「不安なことについて」は、どんな感じなのか想像がつかず不安を感じるということや、障害者と親しく接することができるのか不安であると感じている学生が多かった。また一人一人がしっかりと動き役割を果たすことができるのかと考えている学生もいた。そしてわかふじアミィの活動で「期待することについて」の質問では、障害者と多く接することにより障害者を理解することができるのではと期待している学生は多く、1年生で65.0%、2年生で53.8%であった。また次いで1、2年生の交流を期待するのが多く1年生17.5%、2年生12.8%であった(図8参照)。





#### IV 考察

わかふじ大会でのわかふじアミィの活動を通して、学生の障害者に対する意識の変化がどのようにみられるのが今回の研究テーマである。その前段階として現在の短大生が、障害者に対しどのような意識を持っているのか今回の調査を通して考えてみた。まず学生が今まで障害者と接した経験は、障害者を見たことがある、数回話をしたことがあるという程度であった。これは障害者が不自由を感じる場合としてのイメージが、外出時の乗り物の乗降や段差といったことを多くあげていることから障害者のイメージが身体障害者に限局しているようである。いうまでもなく障害者には、知的障害者や重複障害者等も含まれているのである。また障害にも様々な障害があり、程度の違い、取り巻く環境によって大きな違いがあるのである。そのため歯科衛生士として口腔から障害者の視点に立って支援していく上で、障害者を十分理解していないといけないのである。そのため今回のわかふじアミィの活動経験は、今後に大いに生かされることと期待できるのである。またわかふじアミィの活動に対して学生は、やりがいは多くの学生が感じていることがわかった反面、大変そうだと感じている学生が多いことがわかった。さらに大変そうだが頑張りたいとわかふじアミィの活動をやるからには前向きに考えている学生が多く、頼もしい。しかし今回の強制的な参加について学生は、忙しい学生生活を送っていることも一因だと思うが当然協力すべきと考えているのはわずかであり、協力するのは県立の短大であるし仕方ないと考えている学生が多く半数弱であった。それに僅差で希望者を募るべきだと考えている学生が多かった。これはわかふじアミィ養成講座開催前にオリエンテーションを実施したり、2年生には、昨年の高知大会を視察した報告会を行ったりして障害者スポーツ大会への理解を深めてもらい、学生ボランティアの意義を学生に伝えたつもりでいたが

あまり通じていなかったといえる。また1年生は、入学したてであり、2年生の視察したときの報告を聞くこともなかったことも影響していると考えられる。

ボランティアという言葉は、広辞苑では、「奉仕者。自ら進んで社会事業などに参加する人またその活動をいう」と書かれている。今回のわかふじアミィの活動は、なかば強制的な形で行われているため、厳密にいうとボランティアには該当しない。しかし障害者との交流経験の浅い学生にとってわかふじアミィの活動は、障害者と接し、コミュニケーションをとることができることから、障害者を理解する上で絶好の機会である。

学生わかふじアミィの活動について興味があると回答したのは3割強であり、興味は特にあるわけでもないわけでもなくふつうであるという回答が半数弱と最も多く関心が特別あるわけではないことがわかった。これは学生が今回の活動で期待するものの回答結果からわかるとおり多くの学生は、今回の活動を通して障害者を少しでも理解できたら良いと考えている。障害者を理解していくことは、人として社会に生きていく上でとても重要なことであるが、そのような機会はなかなかないのが現状である。最近では小学校、中学校、高校の活動として、障害者等との交流事業を行うところが増加しているのは、良いことである。しかしその活動ではそれほど深い関わりはできず障害者を十分理解するというわけには行かない。高校までの交流事業を障害者と接するきっかけとなり、できればその場限りでなくその後のボランティア活動に繋がっていくことが大切であると考え。またそういった活動が、将来歯科衛生士となって就業し、患者さんや地域の人々と接していくときに活かされるのである。

高知大会に学生ボランティアとして活動した高知大学の学生のボランティア養成講座終了時の感想として「初めてのことばかりで自分の世界が広がった。」「障害者の話を聞いて少し障害者について理解することができた。」と述べている。高知大学の学生ボランティアは、医療福祉系の学生ではなく特に障害者についての科目がカリキュラムに入っているわけではない。また活動の参加については、強制ではなく希望者を募っている。それに比べると歯科衛生学科の学生は職業上人と向き合っていく仕事であり障害者関連の授業も2年前期に組み込まれており2年後期には障害児実習として養護学校実習等も取り入れている。しかしカリキュラムの関係上学生は、学校生活において時間的余裕がほとんどないのが現状であり、そのためボランティア活動や1、2年生の交流は、全くといってよいほどできないのが現状である。今回の活動は学生にとり必ず多くの発見、学びがあるものと考えている。それは障害者を理解する一助としてだけでなく1、2年生の交流についても期待している。というのは今回のわかふじアミィの小グループは、1、2年生の混合で編成されている。そのためわかふじアミィの活動を通して1、2年生が交流し、親しくなることができるのではないかと考えているのである。また学生達も障害者を理解することの次に学生間の交流を期待していることがわかった。

Vおわりに

今回本学の学生達が、静岡で開催されるわかふじ大会にわかふじアミィとして活動する機会を得た。わかふじアミィの担当委員として平成14年度から関わってきた筆者は、この活動を通して学生達の障害者への意識やボランティア活動についての意識がどのように変化するかを研究課題として考えた。そこで今回は、大会に参加する前の学生の現状を把握するために、障害者に対しての意識がどうであるのか、またボランティア活動についての意識調査を実施した。その結果学生の障害者との関わりは薄く、障害者についてのイメージも身体障害者に偏ったイメージであった。ボランティア活動については、半数強が活動経験がない学生につい

でも興味を持っていることがわかった。しかし学生は、カリキュラムが目一杯にくまれている現状からなのかわかふじアミィの活動については、やりがいは感じるが大変そうであると考えている者が多かった。しかしその多くは、わかふじアミィとして活動することで障害者を理解する一助となると期待していることもわかった。また1、2年生間の交流を期待している学生もいた。まもなくわかふじ大会が開催されるが学生の意識がわかふじアミィの活動を通してどのように変化するのかは、終了後にアンケート調査をし学生の意識の差異を調査つもりである。

#### 参考文献

- 1) 高知大学：障害者ボランティアの理論と実技,「障害者ボランティアの理論と実技」実施  
専門委員会, 2002,3
- 2) 新村 出 編：広辞苑第五版, 岩波書店, 1998
- 3) 若月俊一：ボランティアのこころ, 労働旬報社, 1994

(2003年11月4日受理)